サンライズ・メイト・バートの広報誌
Rising Sun
Vol.88
令和3年7月25日発行
ライジング・サン
訪問介護・居宅介護支援事業所
サンライズ・メイト・バート株式会社
東京都足立区東綾瀬1－22－1　ル･ヴァン綾瀬1Ｆ
電話　03－5697－9895 FAX　03－5697－9896
発行人　代表取締役　井上明美

代表からのご挨拶

サンライズ・メイト・バート株式会社
代表取締役　井上　明美

いつも皆様方には、格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。連日猛暑が続いておりますが、いかがお過ごしでしょうか。2020年東京オリンピック開催となりましたがコロナ禍の中開催の是非はともかくとして、日本人選手の活躍に目を見張り胸躍る毎日です。コロナ感染者数が増える中、いかに以前の平穏な生活を送れることがしあわせな時間だったのかと身に染みております。暑さ厳しい折りくれぐれもご自愛ください。

サンライズの物語

亡くなるという意味―――
人の想いについて考える物語

その方は、昨年暮れに体調を崩し入院し末期の肺がんを診断された方でした。今年1月末に退院した当初は体調を持ち直し、抗がん剤治療を受けて好きなパソコンも自宅で行っていたのです。

そんな時、急に6月中旬に左肺に転移し、担当医より「会わせたい人がいれば、すぐに会わせた方が良い」と言われ、友人や親せきに会わせたとの事。毎日みるみる間に悪くなり、ベット上の生活となってしまったのでした。

奥様はご主人を「殿」と呼んでいて、ご主人の枕元で以前二人で旅行した世界中の懐かしい話をしていたのが印象的でした。そんな時、奥様が見守るなか息を引き取ったのでした。

お悔みに訪問すると奥様から「主人が居なくなってから自宅の中でいつも主人の陰影を追いかけている自分に気が付き、涙を流し・・・無意識に主人に話掛けようとしては居ない事に気が付き涙を流す・・・」と話され泣かれておりました。

亡くなるという意味・・亡骸はなくなってもいつも奥様の隣で見守っている。見えなくても話しかければ通じている。これからはご主人が生きられなかった分まで生きることが、ご主人と生きる事になると思うと伝えました。

ご利用者様との別れや残されたご家族の想いを聞く度に人は死なないのではないかなという思いに駆られます。

サンライズのデイサービス陽光だより

【タオルで玉入れゲーム】
２人で息を合わせ、タオルを揺らしてボールを箱に入れます。
『難しい～』と言いながらも箱に入るまで何度も挑戦したくなります！
上半身の運動にもなり、皆さんの笑い声と会話も弾む楽しい時間となりました。

新しい仲間が増えました！

【介護福祉士】小櫃美和

７月１日に入社致しました小櫃美和と申します。
好きな言葉：『生きてるだけでまるもうけ』明石家さんま
一日一回以上笑えたら幸せ。
ご利用者様の笑顔を増やせたらもっと幸せです！

井上からエール！

小櫃さんをどうぞよろしくお願いします。

NEWS　今月のニュース

高齢者に訪問介護ならぬ“訪問蚕”　時間を忘れて思い出話

　かつて京都府福知山市などで盛んだった養蚕の文化継承を行う蚕業遺産研究会の吉田武彦さん（62）＝水内＝が、地域福祉の一助になればと、訪問介護ならぬ“訪問蚕”と称した活動を実験的に始めた。市内の高齢者たちの交流の場に蚕や繭を届けて、懐かしい思い出話に花を咲かせてもらうのがねらいという。吉田さんは、三和中学校で社会科の教員をしていたころ、三和町内でもかつて養蚕が盛んだったことから、「歴史の教科書で生徒たちに養蚕を教えているが、まずは自身が実体験することが大事」と思い立ち、2017年から学校で生徒たちと一緒に蚕を育て始めた。
　それから毎年、衣笠繊維研究所理事の廉屋巧さん＝大江町金屋＝や養蚕農家の桐村さゆりさん＝下天津＝から蚕を提供してもらったり、育て方のポイントを教わったりしながら育てている。昨年は、蚕業遺産をテーマとしたフォーラムのパネリストらで、養蚕文化を次世代へ継承する方法を探る「蚕業遺産研究会」を発足させたほか、蚕具の収集・保存活動をする。訪問蚕の取り組みを知ったのは昨夏。同研究会のメンバーとともに、養蚕業の復活プロジェクトに取り組む兵庫県養父市を視察した時だった。高齢者たちのもとに蚕を持っていって交流を深めていると聞き、「蚕を福祉に生かせるのでは」と、実験に踏み切った。
　蚕は飼育箱の中に入れると外に出ることはなく、また手をかむこともないので、けがなどの心配がいらないため、高齢者のもとに持っていきやすいという条件もあった。6月上旬、三和町友渕の交流の場「すこやかサロン」を運営する森脇和美さん（62）の協力を得て、実験を開始した。第1回には70代、80代の男女4人が森脇さん宅に集まった。吉田さんが体長7センチほどの蚕120頭を自家用車で届けると、参加者たちは、農家を助けた大切な副業であったことや、まだ夜が明けないうちから餌になる桑の葉を取っていたこと、住み込みで養蚕農家の手伝いに行っていたことなど、懐かしい話が絶えることなく続いた。
　森脇さんは「6月中に計4回、サロンのメンバーが少人数制で蚕や繭を見ましたが、みなさん時間を忘れて昔話に盛り上がっておられました。高齢者にはいろんな関わりが必要。この取り組みは良いですね」と話す。吉田さんは「蚕は扱いやすく、子どもから高齢者まで様々な世代の人から反応があるところが良い。教育、福祉、国際交流など、養蚕の可能性を今後も追求していきたい」と話している。

＜両丹日日新聞
2021/7/15(木)＞

広報誌「ライジング・サン」のバックナンバーは、弊社ホームページでもご覧いただけます。

ぜひお立ち寄り下さいませ。http://www.samaba.jp/back-number/